

## 程度表現「PどころかQ」における反期待の構造

Structure of Anti-Expectation in the Degree Expression “P dokoroka Q”

川端元子 †  
Motoko Kawabata

**Abstract** This paper examines the sentence “*P dokoroka Q*”. We use this sentence to emphasize Q by negating P and showing the degree of difference between the two. In this study, the purpose is to observe the semantic function by elucidating how it differs from other comparative constructions in the way in which P and Q are treated.

Results of the analysis show that the value of Q is the opposite of the direction of expectation on the scale of the degree of expectation presumed when P is set. In other words, the value of Q is characterized as anti-expectation. The fact that Q is the direct converse of the direction of expectation produces the effect of emphasizing the difference of degree.

Also, if a particular direction of anti-expectation does not need, and only the fact that the proposition is not in an expected condition needs to be shown, the expression employed would be “*P dokorodewanai*” In either case, the intention of the expression is produced by the negation of the movement toward the direction of expectation that is presumed when P is set.

### 1. はじめに

「PどころかQ」「PどころかQない」という表現形式がある。例えば次のようなものである。

- (1) 非行どころか犯罪に発展する可能性すらある。
- (2) 暖炉どころかサイドボードもなく、下駄箱すらないのだ。(ノルウェイの森)

この形式についてはこれまでPとQの関係や、類似表現形式との比較対照からその意味機能が考察され、先行研究には初(1981)<sup>1)</sup>、張(1993)<sup>2)</sup>、服部(1995)<sup>3)</sup>などがある。

初(1981)はこの構文を、①共存しない、相反するPとQの組み合わせにおいて前件を否定して後件を強調する、②共存しうるが低程度のPと高程度のQにおいてPへの限定を否定してQを強調する、③高程度のPを否定して低程度の否定されるQを強調する、の三つに分類した。

張(1993)は「前件の事柄を単純に取り上げて否定するのではなく、前件との程度差を意識しながら、よりはなはだしい後件の事柄を強調して、前件より後件の方に重きを置いて表現する」とする。

服部(1995)は初(1981)について、共存しうる内容であるかどうか、前件や後件が否定表現であることや程度の大きさが、直接には構文の意味を左右するものではないことを指摘する。また、後件の強調という初(1981)や張(1993)の説明は曖昧であると批判する。そして、「Pである」と断定することの妥当性を否定した上で、「P vs. [Pの否定される事柄として一般的に思いつくもの = p]」の対から外れた位置にあるQを導く。PとQは程度性の序列関係を背後に想定でき、「 $Q > P : p$ 」か「 $P : p < Q$ 」の関係にあるものであり、前者ではPよりQが、後者ではpよりQが高度な事柄とみなされるものでなければならないとまとめている。

ところが、後述するように、実際にはそのような説明では不十分な点がある。さらに、この構文において、強調される後件と「Pである」ことの妥当性を否定される前件が組み合わせて示されることが、どのような効果を持つものについても考察の余地がある。本稿では、実際に現れたPとQの関係をもとに、なぜそのような関係が創出されるのかについて検討する。そして、「PどころかQ」という構文の談話における機能を明らかにしたい。

† 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

## 2. 従来の説明を逸脱する個性的な「PどころかQ」

先にも述べたが、従来の研究の説明では説明しきれないタイプの「PどころかQ」がいくつか存在する。どのような点が説明できないのか、次に見ていく。

第一に、服部（1995）では一般的にQは「Pの否定として当然のように想定される事柄であってはならない」とされるが、次の例ではそうなっているように見える。

(3) 彼は事件に不在どころか、確固として存在していた。（梟の城）

(4) 間接どころか直接フトコロを直撃！——EC型付加価値税の正体（宝石3, 1983）

(3) については「確固として」の挿入が「存在していた」より程度が大きいことを表すからとも考えられる。しかし、(4) は語の意味（掛詞的含意を考慮しない）としては  $p=Q$  であり、「PどころかQ」がP、p、Qが作る序列が見だしにくい。背後に存在する程度の序列に必ずしも影響されないのではないかとの疑問を持たざるをえない。

次に、PQが明示されたうえで、その背後の程度性がそれにつづく内容で示される場合が少なくないという点である。以下に例を挙げる。

(5) 天下大乱どころかいまや10・25改造が焦点だと！——福田“黄門”の「政局は終わった」発言で鈴木タナボタ内閣安泰のしらせすぎた秋（文春24, 1982）

(6) 江戸の町はうさぎ小屋どころかカタツムリ小屋、半分身が出ちゃう過密ぶりで…（対談：三枝のホンマでっか・読売51, 1992）

(7) 都立校の学区廃止で日比谷どころか意外「この新名門」（読売58, 1999）

とくに、雑誌や記事の見出しについてはそれまでの文脈なしに「PどころかQ」が提示されるので、判断の提示者と受け手の間の共通理解に支障をきたすから補足が必要になるのであろう。そこで、そうまでしてなぜこのような表現が用いられるのかが考えられねばならないであろう。

第三にことば遊び的に用いられる場合があるという点である。次の例を見てみよう。

(8) 和田勉、三波春夫がNHKをぶった斬る——紅白どころか「古・悪」歌合戦じゃないか（ポスト19, 1987）

(9) “3日で人魚”どころか“4日で仏”がにわかダイビングブームの実情（インタビュー記事・SAPIO4, 1992）

(10) 「地方の時代」どころか「地方危機の時代」になった——統一地方選の準備のために（社会主義367, 1982）

(4) も「韻を踏む」のようなことば遊びが組み込まれており、程度性の序列という背後関係の存在が表してい

た意味が次第に拡張されて、その含意だけが援用されてきたと考えられる。ただし、本来の表現のどの部分が拡張されたのかを探る必要もあろう。それは、このようなインパクトを与えることが目指された表現だけでなく、Pとpからだけでは後件Qが序列をつくるものとして選択される必然性を持たない場合があるからである。次の例では、後件Qに提示される内容として複数の可能性がある。

(11) 彼はうまいどころか [ボールの投げ方も知らない／プロ顔負けだ]

(12) ほとんど変わっていないどころか、下降させている。（中日新聞199805）

実際に、(12)の「変わっている／変わっていない」と「下降している」には程度性における何の必然性もない。「上昇している」が選ばれなかった理由は発話の中で伝達が目指された情報に求められなければならない。つまり、どのような共通の属性で程度性の大きな差が想定されたのか、無限に可能性のある中でなぜそれらが選ばれたかについて、それを説明する一定のルールが無ければならない。

## 3. 「PどころかQ」構文の構造

### 3・1 前件Pの特徴

Pには動詞、形容詞などの状態性の語句、名詞、文などさまざまなものが立つ。

(13) 書き終わるどころかまだ書き始めてもいない

(14) うまいどころかプロ顔負けだ。

(15) 90点どころか100点を取った。

(16) 「愛しているよ」どころか「ただいま」さえも言ってくれない。

これらの例のPは、すでに提示されている場合はそれを承け、文脈から想定される場合はそれを承けるという点で共通する。次の例も同様である。

(13)' ねえ、もうそろそろ書き終えた？／いや。書き終わるどころかまだ書き始めてもいない。

(14)' 彼はかつてリトルリーグで活躍していたらしいよ。相当うまいんじゃないかなあ。優秀選手に選ばれたこともあるらしいから、3年やってないと言ったってうまいどころかプロ顔負けだよ。

このように、Pは話し手自身や話し手以外が疑問文のかたちで提示している場合と、それまでの話題の中に出現した内容である。

一方、新聞の見出しなどPとなるものがあらかじめ示されていない場面で用いられる「PどころかQ」の場合は、話し手と聞き手（書き手と読み手）の間に何らかの共通理解が必要となる。Pは聞き手が当然知っていることでなくてはならず、Qを示すことによってPとQの背後の序列までもが想起されねばならない。さもなければ、Qを提示したことでPを持ち出した話し手の意図が理解

されねばならない。つまり、PとQとは慣用的な組み合わせではないため程度スケールは無数に設定できる。したがって、程度性以外の「話し手の表現のねらい」という側面での関連性が必要となる。

以上より、Pはそれ以前に示されている時はそれを単純にうけるものである。それは話題進行の中の当然の帰結や予想される展開といったあり方でもある。この場合は「それどころか」で承けることも可能である。一方、それ以前に提示されていない時は、話し手の主観的価値づけによって普通のあり方とみなされるものと言える。

### 3・2 後件Qの特徴

では、後件Qが前件Pより「高度な事柄」（服部 1995）であるとはどういうことであろうか。

前節より、後件Qの資格を満たすものはPまたはpより意外性のある事態であり、前件Pで行われた認定が不適切あるいは不十分であることを表示するものである。したがって、発話以前にPにあたるものが提示されていれば、そのような認定を覆すものとして選択されたとしてQを理解できる。Pにあたるものが提示されていなければ「常識的なレベル」「いかにもありそうなレベル」Pを覆すQが選ばれる。したがってPがどのような想定を背後に持っているかが読みとられなければQの提示は意味をなさない。

なお、次の例ではPが事実である。

- (17) 同じ中学生でも沖縄の中学生は、修学旅行どころか連日、基地に接して暮らしている。（日本経済新聞 199805）
- (18) 日本一の軍法達者が、十万百万どころか、わずか五人の人数をひきいて近江の片田舎を歩いている。（梟の城）
- (19) 松田さんは「息抜きのつもりで楽に読んでください」と言っているが、毎回、息抜きどころか、なるほどとため息をつきながら読んだ。（毎日新聞 199806）

この場合にはPと対比的に強調されるのは「事実」Qということになる。そこで、なぜ直接そのみが強調されないのか、後件Qの強調のために選ばれる前件Pはなぜ必要なのか、どんな意味を持つのかも問題になる。

前節での考察から、事実ではないPが「常識的なあり方」となり、すでに提示されている場合は、その場における設定された基準になる。Qにおいて事実が強調されるためにはPの見込み値がQとかげ離れた位置にあったことが示されねばならない。Qという事実は「普通」のPからみれば理不尽なほどに意外なものと言える。こうして、事実Qに価値づけが行われる。

### 3・3 前件P、想起されるp、後件Qの間にある序列は必要か

次の例ではPとQの間にある序列は単純ではない。

- (20) 彼女が帰ったかだって。帰るどころか来ていないよ。

これは、次のように理解できる。

- (21) 彼女は帰らない（帰っていない）どころか来ていない。

Pの否定p「帰っていない」に対して、さらにそれ以前の段階に立ち返り「来ていない」を提示することで後件の程度の大きさを表しているということになる（服部 1995）。ただし、この場合の前件「帰る」は、彼女の動向を知らない人物の「帰ったか」という質問によってそれ以前に提示されている必要がある。また、「帰ったか」と聞かれた当該の人物は実際には来ていないのだから、「帰っていない」は論理的には正しい。したがって、この発話は次のように解釈される。

- (22) 来ていないのだから、当然帰ることもない。

これは、実際には「帰ったかどうか」を問題にすること自体が無意味であることを述べるものである。したがって、「 $P : p < Q$ と $Q > P : p$ 」（服部 1995）のpにあたる「帰っていない」は序列としては存在するが、わざわざそれを潜在的な基準として介在させてまで前件Pに設定する必要はないように見える。ここでのPは提示されたからそのまま承けたのであって「彼女はどのようにしているのか」というと問いかけなら返答には提示されない。したがって、最初に「彼女は帰ったか」という質問した時点の話し手の見込みをとりあげ、それが妥当でないことを表示するために利用されているに過ぎない。そして、大きく異なる事実を伝えることによって、妥当でないはなはだしく不当な見込みであったことを含意する表現として元の話し手に返す発話である。

このように、PもQも話し手の表現意図のもとに価値づけされて文脈上の意味を与えられている。そして、その表現意図のもとにPとQの程度差の大きさ、Pという想定の不適切さが提示される。そのために、見込みの妥当性をはかるための序列もしくは程度スケールを背後に持っていることになる。

## 4. 「PどころかQ」の比較構文としての性質

### 4・1 前件と後件の関係

これまでPとQの関係については考察されてきたが、それらは主にPとQの内容や意味の関係に注目したものであった。ここでは、むしろ、「PどころかQ」を構成する素材(対象となる事態)のとりあげ方という側面から、その特徴を考えることにする。

#### 4・1・1 PとQが累加関係にある構文との比較

「PばかりかQ」や「PはもちろんQ」「PはおろかQ」を用いた構文を見てみよう。

- (23) 美濃どころか、近江、越前、尾張、三河、遠江、駿河、どこでも悪い。（梟の城）
- (23)' 美濃 {ばかりか／はもちろん} 近江、越前、尾張、

三河、遠江、駿河、どこでも悪い。

(24) 大雪で電車 {ばかりか/はもちろん} バスも遅れている。

(24)' 大雪で電車どころかバスも遅れている。

(25)??後半 11 分にトリオの一角 MF チアゴネービス (21) が想定外の退場処分。10 人で戦うことになった仙台は、攻める {ばかりか/はもちろん} 防戦一方になった。

(25)' 後半 11 分にトリオの一角 MF チアゴネービス (21) が想定外の退場処分。10 人で戦うことになった仙台は、攻めるどころか防戦一方になった。(日刊スポーツ 20060319)

(23) の「どころか」は「ばかりか」「はもちろん」に置き換え可能だが、(25) では「ばかりか」「はもちろん」への置き換えがしにくい。(24)' の「どころか」は電車よりバスの方が遅れるとは考えにくいという明確な程度差がなければ、驚きがなく不自然に感じられる。その場合は、「バスも」ではなく、「バスが」の方が自然であろう。一方、(25) は置き換えることによって、攻めていかつ、防戦一方という矛盾した状態になる。つまり、「ばかりか」「もちろん」が「Pに加えてQ」や「その上」「そして」「さらに」などと置き換えられるのに対し、「どころか」が置き換えられないことを示している。このことは、安達 (2001) <sup>4)</sup> の指摘も参考になる。

(26) 僕以上に彼はうまくやっつてのけた。

「P以上にQ」の構文では、「PはA、しかし、それ以上にQはA」を含意するという点である。「PばかりかQ」や「PはもちろんQ」もこれと同じであることがわかる。

また、「PはおろかQ」も同様の性質が認められる。

(27) 少ないとは思っていたが、3人はおろか1人も来ていない。

(28)??彼女の飼っているウサギは人を見るとおびえた目をする。きっとかわいがるのははおろかいじめているのだろう。

(28) は、「3人来ていないのはもちろん、一人も来ていない」と解釈できるので、事態を減じる方向への程度スケールの進行、すなわち負の方向への事態の累加であり、内容的に累加できないものについては (25) と同様に不自然となる。

「PどころかQ」のPとQは、必ずしも「PもQもAである」とは限らない。「PばかりかQ」に置き換えられる (24) においても、バスは想定していたが、電車は想定外だったとすれば、PとQは対立的な関係にあり、(23) においても、想定されていた前項と想定されていなかった後項という関係ならば、見かけは累加でも、PとQは正反対の関係にある。

#### 4・1・2 PとQが序列を作らない構文との比較

「PもなにもQ」は、前節の「ばかりか」タイプが置

き換えられない次の例において、「PどころかQ」と置き換え可能である。

(20)' 彼女が帰ったかだって? 帰る {どころか/何も} 来ていないよ。

序列のないPとQの組み合わせも可能で、「彼女が帰る」と相手の見込みを受けてそれを却下している点で、「PどころかQ」と似ている。

しかしながら、次の例では許容されない。

(29) コーヒーを注文したが、来たのはとてもコーヒーと言える代物ではなかった。これではコーヒー {どころか/??もなにも} 茶色のお湯だ。

(30) 腹を空かして家にたどり着いたが、食べ物 {どころか/ばかりか/はおろか/??も何も} 水さえもなかった。

「どころか」は直前でPに対する否定的見解が述べられていても使えるが、「もなにも」は不自然になる。また、服部 (1995) が指摘するように、「もなにも」はPとQの間に共通するカテゴリーがなく、序列自体を設定できない場合がある。そのため、(30)のように、前件を否定していてもPとQが同類とみなせる場合には不自然となる。

「PもなにもQ」は前件Pというあり方を認定しないこととその理由を示すものであり、「PどころかQ」は、Qを示すためにあえて認定されないPを提示するものである。

#### 4・1・3 前件を否定する構文との比較

「PよりQ」や「PというよりQ」を使った比較構文は、「PよりQ」や後件Qがそのまま述部となれる点で「PどころかQ」と似ている。しかしながら、次の例では置き換えにくい。

(31) 論より証拠。

(31)' ??論どころか証拠

(32) どちらかというと、これは勉強というよりライフワークだ。

(32)' ??どちらかというと、これは勉強どころかライフワークだ。

上の例はいずれも、PとQに序列があつて後件Qを強調するものである。しかしながら、「より」「というより」を用いた比較構文は、適切さの程度によって相対的上位項である後件を選択することが、結果的に前件の否定になっているにもかかわらず、「どころか」に置き換えると不自然になる。

さらに、適切さのスケールを用いにくい例を見てみよう。

(33) 「前進どころか後退」棄却判決に唇かむ遺族。(毎日新聞 20140205)

(33)' ??「前進より後退」棄却判決に唇かむ遺族。

置き換えは可能としても意味が変化する。あくまでPと

## 程度表現「PどころかQ」における反期待の構造

Qの比較になる「より」に対して、「どころか」では、「前進」と「後退」の正反対の方向性がとりあげられて強調されている。前件は期待されるもの、後件は最も期待されなかったものである。

以上の例から、「PどころかQ」のPとQは、相対的に程度差が大きいものでなければならないという服部(1995)の指摘が確認できる。そして、序列自体が必ずしも「適切さ」で測られているのではないことも明らかである。Pは期待のあり方として選択され、Qはそれを裏切る方向として選択される。

### 4・1・4 前件を排除する構文との比較

「PどころかQ」と同じく、前件を否定する「PではなくQ」はどうか。次の例を見ると、「PではなくQ」において否定されるPは、「Qが正しくPが間違いである」という意味での否定となっている。

(34) 正解は3番ではなく5番だ。

(34)' ??正解は3番どころか5番だ。

上の例で3番と5番には序列があるわけではない。その(34)'が自然に感じられる場合とは、正解予想のアンケート結果で、最も多かったのが1番であり、3番を予想する人は少ないものの発話者が期待していて、5番は誰も予想していなかった、といった状況があるときである。「3番もあり得ないと思っていたが、まさかの5番だった」という感じであろうか。いずれにしても、単に間違いを正すものではない。

しかしながら、「どころか」は「ではなく」に置き換えられるものも多い。

(3) 彼は事件に不在どころか、確固として存在していた。  
(梟の城)

(3)' 彼は事件に不在ではなく、確固として存在していた。

(8) 和田勉、三波春夫がNHKをぶった斬る——紅白どころか「古・悪」歌合戦じゃないか (ポスト19, 1987)

(8)' ??和田勉、三波春夫がNHKをぶった斬る——紅白ではなく「古・悪」歌合戦じゃないか (ポスト19, 1987)

(3)'のように前件を否定するだけなら「ではなく」との置き換えが可能である。このとき、PとQに序列が見だしにくく、二者択一に見える点もそれを補助している。一方、(8)'のように前件が不正解ではないため、訂正にならないような例では不自然になる。

「PどころかQ」の前件Pを否定することは、間違いの訂正ではない。むしろ「正しい」ものを否定して不正解表すことがあり、その表現としての効果が注目される。

### 4・2 比較構文「PどころかQ」の位置

以上、類似表現との相違をとおして、「Pどころか

Q」の構文の性質が大まかに理解できる。Pに対するQの関係から整理すると以下ようになる。

(35) 表1：Pに対するQの関係

	両方肯定 (累加)	前件 不認定	比較 選択	訂正
PどころかQ	△	○	○	×
PばかりかQ類 PはもちろんQ PはおろかQ	○	×	×	×
PもなにもQ類	×	○	×	×
PよりQ類 PというよりQ	×	×	○	×
PではなくQ	×	×	○	○

比較構文としての「PどころかQ」は、期待されるあり方や常識的なあり方Pに対する、期待されないあり方や非常識なあり方Qという、対立的な関係にあるものから構成されていた。期待されるあり方を認定せず、対立するQを持ち出すことで、その較差を示していた。服部(1995)の指摘にもあるが、程度性による序列が想定できる場合は程度の差の大きいQが、序列が想定できない場合は常識的な範囲にある聞き手の見込み値を覆す意外性のあるQが提示され、程度副詞「もっと+ずっと」の組み合わせのように、想定範囲から逸脱することが目指される。

したがって、後件Qが事実であるときは、Qが発話主体や受け手にとって標準的な普通のあり方とは言えないものであると考えてよい。予想される展開や当然の帰結から外れたり、それらを覆されたりしたかけ離れたあり方ということが含意され、それを効果的に示すPが選択される。ある対象となる事態に対して、期待されるあり方Pを認定せず、対比されるQを選択・適用するが、一面では正解としつつも、非常識で受け入れがたいという事態把握を共有させるものであった。

## 5. 「Pどころではない」の意味

### 5・1 「PどころかQ」の「どころ」とは何か

さて、「どころか」はどのようにして文法形式になりえたのであろうか。まずは、「ところ」に注目してみる。

「ところ」は「もの」「とき」「ばあい」のような具体的な側面とともに、瞬間的なタイミング(時点)やそれが一定期間継続して設定された状態(あり方)、さらにはそのような場面を設定することができる。

(36) 学校から帰ってきたところにちょうど電話がかかってきた。

(37) さっき帰ってきて、少しくつろいでいたところだ。

(38) バスが到着してみんなが乗り込もうとしているところに、トラックが衝突した。

また、英語の関係代名詞を使った構文の連体修飾節の直訳例として、次のように「ところの [名詞] (もの)」「ところの場所/時間/状況/場面」という表現が用いられることがある。

(39) a. It is the book, which I bought yesterday.

b. それは昨日私が買ってきたところの本だ。

時間におけるある「地点」をとりあげ、対象となる事態のそこに至るまでの経過と結果状態、すなわち、成立事情とあり方を示している。いわば、直接に「もの」をしめすのではなく、どのようなあり方のものかを示していることを示している。このように「ところ」は「地点」が表す内容に「時空間」から切り取った程度性をもったある状態を、段階表示した「スケール」上の一地点(程度)をも表すことが可能であり、他に比べて意味拡張の度が高い(池上 1999)<sup>5)</sup>。また田窪・笹栗(2004)<sup>6)</sup>では、「領域において記述が成り立つと限定された『部分』をトコロが表すため、『記述+トコロ』は、特定の領域におけるその要素の所在、位置(=location)を表すことができる」と述べ、アスペクト局面の系列や一連のシーンの系列から一局面や値を取り出す機能があるとする。

その結果が、田窪・笹栗(2004)にもあるが、など次のような例や接続詞「ところで」「ところが」への拡張へとつながっていると考えられる。

(40) 彼に訴えてみたところで今さらどうしようもない。

このような意味拡張は、「ものの」や「ものから」、事例や場合を表して、時間からはなれる「夜遅く帰るときには迎えにきてもらう」の「とき」などにも一部あるが、「場合」や「場面」にはみられない。

## 5.2 接辞の「どころ」

「さま」に対する「ざま」、「ふり」に対する「ぶり」が接辞として文法化したものであると秋元(1994)<sup>7)</sup>に指摘がある。いずれも、語の結合により濁点を有する接辞の方が意味的に固定化される傾向にあり、単独で用いられる場合もマイナス評価を有するものとなっていることが指摘されている。では、「どころ」の場合はどうか。

「ところどころ」といった同形連続による濁音化を除くと、次のような三種に分類できる。

- (41) a. こらえどころ、見どころ、思案のしどころ  
踏ん張りどころ  
b. つかみどころ、とらえどころ  
c. きれいどころ、勘所  
d. うまいもどころ(茨城食と農のポータルサイト)、京の鳥どころ八起庵、味どころ、麵どころ

a は対象となる事態についてある側面からはかったときの最も中心的な部分であり、山場であり、重要な場面で

ある。それは一定期間継続する事態についてタイミング(時点)とも言え、流れの中の一地点という意味での「場所(局面)」でもある。bはとっかかりともいえ、きっかけとなるポイントをもとに、そうすることが可能な内容やそれによって描き出されるある像と言える。それがさらに具体化して対象のあり方そのものを表したのがcやdと言えよう。

これに対して、「PどころかQ」の「どころ」とは何を表すのか。(41)のaは用言の連用形や名詞+「どころ」であり、「Nどころ」はNと「どころ」が対等あるいは「Nであるどころ」というようにNが「どころ」を連体修飾している。一方、「PどころかQ」のPは、名詞以外には用言なら基本形(終止形)であり、完結した文も立つことができる点で(41)のNとは一見異なる。しかし、「Pで表されたあり方」+「どころ」であるとしたら、名詞節+「どころ」として(41)と同様に扱うことができる。すると、Nと「どころ」が対等な関係にあるcdグループとみなすことができよう。

## 5.3 「…どころか」のあらわす「どころ」

「どころ」は「の」をともなつて、「帰るどころの話ではない。」「子どものけんかどころの騒ぎではない。」といった名詞の修飾をする例もある。このときの「どころ」は頭高のアクセントであるため、直前の「帰る」や「けんか」と一語化しているとは考えにくい。これは「どころか」や「…どころではない」のときと同じであり、直前の語句から独立した表現として機能している(服部 2005)<sup>8)</sup>ことがわかる。また、(41)のdにもこの傾向がみられる。

これもふまえ、4において考察した比較構文としての「PどころかQ」をもとに、「Pどころか」を再度考えてみると、次のように捉えることができる。

(42) Pというありかた。発話の場面で期待された、妥当で常識的なありかた。反期待Qとの間に大きな程度差があることが示されることによって否定されるもの。

この比較構文ではむしろ、比較基準はQであり、Qに対して相対的に大きく程度差のある(期待値は高いが実現性が低い)Pが位置づけられることになる。こうして、Pで示される「あり方」が相対的に不適切とされQに比べて大きく程度性が劣ると示されることは、それ以前にあった提示された想定値や常識的想定値の不当性を述べることになる。これから考えると「PどころかQ」のPやQは序列をもってはいるがその序列が有する程度を示すのではないことがわかってる。

## 5.4 「…どころではない」の意味

では、「PどころかQ」と「Pどころではない」は何が異なるのか。次の二つの例を見てみよう。

(43) 彼女は帰るどころか来てもいない。

(44) 彼女は帰るどころじゃない。

先にも述べたように、「どころか」の場合はPQの序列を作るスケール上において程度差が大きいことを表すことによってPが検討対象として問題にならないことを示すものであった。一方、「どころではない」では序列の一つを用いてその見込値や認定したあり方Pが問題外であることを表すのだが、Pが問題外であることを傍証するQがない。

ここで問題となるのが、先にとりあげた「ばかりか」などと置き換えられる「どころか」のうち、事態を累加しているように見える次のような例である。

(23) 美濃どころか、近江、越前、尾張、三河、遠江、駿河、どこでも悪い。(梟の城)

上の例では、「どこでも悪い」とある以上、美濃と他の国とのあいだに程度差はあれ、期待値の点で較差があるとは捉えにくい。先にも述べたように、話題に上ったか発話の場面で情報として共有されていたかどうかの違いでしかないだろう。つまり、PとQに程度差がなく、どれも大差ないならば、Pとして示された期待や設定、基準自体の妥当性が否定されていること、Pのあり方自体が認定されないものであることを示していると思われる。

したがって、(45)において、彼女に対してPという想定や認定をすること自体が、いわば、検討対象としてPを提示すること自体が問題外であることになる。当然のことながら、隠れたQにはいろいろなPとかけ離れた事態が想定されていて、それらもすべて否定されていることになるが、Pという設定自体が期待値であり、それを否定することにより、反期待となっている。

## 6. 結び：「PどころかQ」構文の表現効果

以上の考察の結果をまとめると、2で取り上げた例文を再度考えてみよう。

まず、「PどころかQ」構文はすでに提示された見込み値や定義に対して妥当性を欠くものであるとの評価が示され、それと対置される内容の強調であった。そのため、PとQの関係において、たまたまQの内容がPの否定として当然のように想定される事柄であったとしてもこの目的のためなら許容される。ただし、PとQが対極反意語のような境界線の不明確な状態性よりも、次のような相補反意語タイプに限られると言ってよい。

(3) 彼は事件に不在どころか、確固として存在していた。(梟の城)

(4) 間接どころか直接フトコロを直撃！——EC型付加価値税の正体(宝石3, 1983)

白黒はっきりしたものの方が強調しやすいのは、認定すべき内容が明示的だからと考えられる。

二つめは、「PどころかQ」構文のもつ意味機能を逆

に利用して、世間で認定されている事柄Pに対して落差のある後件Qを強調する方法の創出が可能になった。これは一種の文法化とも言えようが、構文のもつ意味を利用した聞き手心理の誘導である。見出し特有の読み手を引きつける表現は強引な誘導のため、後に続く部分でPQの関係が補足される。

(5) 天下大乱どころかいまや10・25改造が焦点だと！——福田“黄門”の「政局は終わった」発言で鈴木タナボタ内閣安泰のしらせすぎた秋(文春24, 1982)

(6) 江戸の町はうさぎ小屋どころかカタツムリ小屋、半分身が出ちゃっ過ぎぶりで…(対談：三枝のホンマでっか・読売51, 1992)

(7) 都立校の学区廃止で日比谷どころか意外「この新名門」(読売58, 1999)

この場合は、後件Qへの興味がそそられれば成功である。

そして、これらの多くが語呂合わせを意識したことば遊び的な表現で関連づけられていることにも注目できる。似たものを並べてその落差や意外性を楽しむ心理が存在している。

(8) 和田勉、三波春夫がNHKをぶった斬る——紅白どころか「古・悪」歌合戦じゃないか(ポスト19, 1987)

(9) “3日で人魚”どころか“4日で仏”がにわかダイビングブームの実情(インタビュー記事・SAPIO4, 1992)

(10) 「地方の時代」どころか「地方危機の時代」になった——統一地方選の準備のために(社会主義367, 1982)

これらは常識的なPの仮面をはげば、実態は落差のある受け入れがたいQであったという驚きを与える構図を最大限に利用した表現である。

このような効果をねらうためには、後件のみの単独での強調は表現としてのおもしろみを失わせることになる。談話においては前件Pが提示された時点で、後件Qに何を選ばなければならないかが価値の一方向性によって決まっていると考えられる。それが発話の場面で共有されている期待である。

(11) 彼はうまいどころか [ボールの投げ方も知らない／プロ顔負けだ]

(12) ほとんど変わっていないどころか、下降さえしている。(中日新聞199805)

上のように二つのQが想定できるとしたら、いずれもPから見て反期待の方向に大きく落差のある表現であり、発話における期待の方向はそのうちの一つである。

以上、「PどころかQ」「Pどころではない」は、ともに、発話時に期待されるあり方Pを認定せず、発話時に設定された期待される方向を否定する点で共通し、反期待のあり方を具体的に示したものがQであった。期待の方向とは正反対の方向の内容が、程度差の大きさを与える表現となっていた。

---

**参考文献**

- 1) 初 玉麟：どころか—その接続と意味の説明・分類をめぐって, 言語, 10-10, 1980
- 2) 張 素芳：「どころか」の用法と機能—「ばかりか」との比較を中心に, 文芸研究, 132, 50-58, 1993
- 3) 服部 匡：「～どころか（どころではない）」等の意味用法について, 同志社女子大学 日本語・日本文学, 7, 43-58, 1995
- 4) 安達太郎：比較構文の全体像, 広島女子大学国際文化学部紀要, 9, 1-19, 2001
- 5) 池上嘉彦：〈モノ〉と〈トコロ〉—その対立と反転, 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集, 864-887, 1999
- 6) 田窪行則・笹栗淳子：日本語条件文と認知的マッピング, 日本語の分析と言語類型, 135-161, 2004
- 7) 秋元美晴：文法化現象 「ふり」から「ぶり」へ、及び、「さま」から「ざま」への接辞化, 67-88, 1994
- 8) 服部 匡：「どころか（～どころではない）」再論, 同志社大学 総合文化研究所紀要, 22, 165-174, 2005

**用例の出典**

・小説  
村上春樹『ノルウェイの森』、司馬遼太郎『梟の城』（新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版）

・雑誌記事・タイトル  
（タイトルの後の数字は巻号名・刊行年）  
光文社『週刊宝石』、文藝春秋『週刊文春』、読売新聞社『週刊読売』、小学館『ポスト』『SAPIO』、社会主義協会『社会主義』

・新聞（数字は記事掲載年月）  
中日新聞、毎日新聞、日刊スポーツ、日本経済新聞、日経 MJ

（受理 平成 26 年 3 月 19 日）